

令和4年1月20日

南の風 2021 ウインターカップ考察Ⅲ

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

この号では、決勝だけでなく男子のゲーム全般を観ての感想を書きます。

ずばり言うと、3Pシュートの決定率と、ディフェンスの強度（留学生や高身長者に対するディフェンスと、ボールマンへのプレッシャー）が勝敗を分けたという気がしました。

例を挙げます。準決勝の福岡大学附属大濠高校 VS 仙台大学附属明成高校のゲームです。

最終スタッツを書きます。

福岡大学附属大濠		仙台大学附属明成
81	PTS	73
10/34 29.4%	3PT	6/34 17.6%
20/63 31.7%	2PT	20/46 43.5%
11/22 50%	FT	15/19 78.9%
51	TR	59
6	TO	19

スタッツのデータ分析は、読者の方それぞれでお願いします。

明成はウインターカップ2連覇が懸ります。

最初に3Pシュートについてです。今回のウインターカップでは、特に男子は3Pシュートを打つ確率が非常に高かったです。福大大濠と明成との準決勝でも、立ち上がり明成はフロントコートにボールを運ぶと同時に、3Pシュートを打っていました。エントリーから打てたらすぐに打つという感じでした。

おそらく、シュートの感覚や入り具合を確かめるためだと思いました。シューターはシュート感覚を大事にしますので、まず打ってみてシュートの調子を確認するところでしょう。ゲームを観ていた方は「タイミングが早いんじゃない」と感じたかもしれませんが、私は、これはこれでいいと思いました。味方の位置（リバウンドに行ける状態など）は確認した方がいいとは思いますが。

明成は1Qでは、ドライブでペイントを突いてシュートに行ったり、外にキックパスをしたりして、中と外の合わせを上手く使って攻めていました。1Qの30点は、ゲームの入りとしては最高でした。

2Q以降、福大大濠のディフェンスの強度もあったのですが、明成は、オフェンスが徐々に単調になってしまいました。3Pに頼り過ぎた感がありました。もう少し、1Qのように中と外の合わせで攻めたかった気がします。繰り返しますが、その裏には福大大濠のディフェンスの素晴らしさがありました。

次に私が観ていて感じたのは、スクリーンの精度と利用の仕方の淡泊さです。福大大濠がゾーンディフェンスを多用したこともあったと思いますが、ピック（例えばドラッグスクリーン等）を利用し、ペイントドライブからバックカットの合わせや、ヘルプディフェンスを見てキックアウトすることなど、もっと試みてもよかった気がします。

才能豊かな選手が複数いる明成でしたが、ややつながりに欠けたオフェンスになってしまったことが残念でした。次号では福大大濠について書きます。